（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	古川　大悟
論文題目	古代日本語助動詞の研究――「推量」の背後		

（論文内容の要旨）

本論文は、古代日本語の助動詞マシ・ベシ・ムの相互関係と意味体系を論じたものである。なお参考論文として古川大悟「カラニ考――上代を中心に」（『萬葉語文研究12集』2017年3月、一部改稿）を付す。

序論

序論では本論文の背景と問題意識について述べ、古代日本語を扱う上で作品の解釈との整合性に留意した助動詞の意味記述を目指し、得られた意味記述を作品解釈に応用できるかを検証することを本論の方法として述べている。

Ⅰ部：助動詞マシの論

第一章では、マシの基本的意味を「ある事態を可能性として提示し、他の可能性と比較する」ものと規定している。上代では二つの可能性の比較、しかも提示される事態が主体にとって望ましい事態の側にマシがつく形になることが多い。中古では三つ以上の可能性を比較する例もあるが、マシが必ずしも望ましい事態につくわけではない。用例分布に上代と中古で異なりがあるものの、総じてその基本的意味には変化がないことを指摘している。

第二章では、マシと密接な関わりを持つ上代特殊語法ズハの消長を記述した。特殊語法ズハは上代から中古初頭にみられるが、これは同時期の強い欲求を表すマシの用法と、「恋ひつつあらずは……マシ」という類型表現に支えられて成立した。しかし、強い欲求を表すマシの用法の衰退と競合する他の表現の出現によって、特殊語法ズハは用いられなくなってゆくことを論証している。この中で、第一章に述べたマシの基本的意味である「ある事態を可能性として提示し、他の可能性と比較する」あり方が特殊語法ズハの記述に有効であることを示し、事態の「可能性」という概念を提案する例証とした。ここには構文が接続関係を変化させる例として参考論文「カラニ考――上代を中心に」を付し、カラが理由・帰結関係を表す順接から逆接へと変容する原理について関説している。

Ⅱ部：助動詞ムの論

第三章では、ムの意味が意志から推量へと派生したとするモデルを提示して、現象の整合的な説明が可能になることを述べている。まずマシとの意味分担としてムは意志を表すことを基本とするが、実際には意志と推量の中間にあたる用例群が存在する。ムが推量の意味を表し得るのは、意志内容の実現が疑われる場合に、実現できる可能性とできない可能性が想像されることを介して、後発的に生じることを述べている。この中で、

複数の可能性のある事態が比較されるため、マシとの重なりを生じることがあったとしている。

Ⅲ部：助動詞ベシの論

第四章では、ベシの意味を「～でしかあり得ない」「他の可能性はあり得ない」という必然性・不可能性において捉えている。先行研究ではベシの意味を対象的意味と作用的意味の二種に区別するという見方がなされているが、申請者は対象の状態と対象に対する主体の認識は不可分であると指摘する。その上で、対象的にみれば事態の必然的生起を表し、作用的にみれば事態を必然的なものとして把握したことをベシが表していると考えられる。ここにマシが事態のあり得る可能性の一つとして把握するものであったことを並行的に捉えることができるとする。そして、偶然性・可能性という意味領域を担うマシと、必然性・不可能性という意味領域を担うベシが対になることを論じている。

第五章では、万葉集の「風吹きて海は荒るとも明日と言はば久しくあるべし君がまにまに」（巻7・1308）の訓詁を通して前章でのベシの分析結果の有効性を確かめている。前掲の万葉歌は解釈に揺れがあり、現在なお判然としない。その要因はベシを「推量」とみたことに起因していることを指摘し、本論での分析を踏まえて新たに訓詁を行っている。そして「仮定条件句＋ベシ」の形式では事態に対する主体の認識を表す作用的意味が前面に現れやすいことを確かめた上で、従来第四句「久しくあるべし」を相手の男性の心情とみて、「貴方は待ち遠しく思われるでしょう」という解釈が行われているが、ベシの類例から主体の心情として「私はきっと待ち遠しく思うに違いない」の意になることを論証している。そして一首全体を「風が吹き海が荒れており厳しい状況下ではありますが、明日まで先延ばしということになったら、私は待ちきれない気持ちになること間違いありません。（どんな状況であっても）あなたにどこまでも付いてゆきます」となることを述べている。

結論

以上の考察を経て、本論ではマシ・ム・ベシの意味について、以下のようにまとめている。まず、他の可能性もあり得るという意味で偶然性・可能性の意味領域を担うマシと、他の可能性はありえないという意味で必然性・不可能性の意味領域を担うベシが対をなしている。これらの二つの助動詞は事態をいかなるものとして把握するかに関わっており、純粋に意志する・推量する意を表すムとは次元が異なる。しかし、ムは意志内容の実現可能性が疑われる場合には推量へと派生することがあり、この中で結果的に事態の可能性の比較を生じるためにマシと重なることがあったと述べている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、上代から中古にみられる古代日本語の助動詞マシ・ム・ベシの意味の体系的記述を目指したものである。

その特筆すべき点として、以下の４点を指摘することができる。

1）助動詞マシに「事態の可能性を比較する」働きがあることを明らかにした。

マシの反実仮想の意味分析から、マシには「ある事態を可能性として提示し、他の可能性と比較する」基本的意味があることを示し、想定し得る事態の範列の中から、主体が自身の評価に従って選択した事態にマシが接続することを明らかにしている（第一章）。事態の可能性の比較という仮説によって、従来のマシの意味記述を大きく進展させることに成功している。

2）特殊語法ズハにおいてマシの基本的意味と構文特徴を複合的に捉えた。

「相見ずは恋ひざらましを」（万葉集586）のように「ズハ…マシ」の形で用いられた場合、ズハが仮定条件句を形成して「見なければ恋しく思わないだろうに」となる。ところが、「かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死なましものを」（同86）とある「恋ひつつあらずは…死なましものを」では「こんなに恋い続けるくらいなら…いっそ死んでしまいたい」の意になる。この場合マシは願望に近い表現になりズハは事実上否定を表さない。従来、否定辞のズの働きが問題視されたが、しかし、申請者はマシの意味が複数事態の可能性の比較と選択にあることを踏まえると、マシによって示された事態は、主体の選択結果として強い欲求を表し得るため、仮定条件句との関係からズハの特殊性が記述できることを指摘している（第二章）。さらに類型の中でズハの後句を「死にかもしなむ」（同2636）「死ぬべきものを」（同2765）とするものがあり、前掲「死なましものを」との表現の類似性からマシ・ム・ベシの相互関係に「ある事態を可能性において提示」するあり方が介在することを指摘している（第二章・第三章・第四章）。

3）助動詞ムにおいて意志から願望を介して推量が派生的に現れることを指摘した。

ムの基本的意味が意志にあることを確認した上で、意志がその実現可能性を疑われることで願望に転じることを用例から帰納し、さらに仮定条件句を伴って、願望される事態が実現困難なまま仮想事態の可能性として提示されるに至ると、推量の意味へと派生することを明らかにしている（第三章）。ムの意志が事態の実現可能性を前提にしていることから転じて、推量へと派生する中に事態の可能性を把握する働きが介在することを指摘した点は、マシの分析との整合性からみても説得力がある。ただし、意志を表すムの人称制限のこと、意志から願望への展開のことは、さらに明確に述べるべきであった。しかし、意志―願望―推量への展開を捉えた点は高く評価できる。

4）助動詞ベシをマシと対照的に把握できることを示した。

従来、ベシの意味には対象の状態に対する「様相的推定」と主体の認識としての「論理的推定」の大別２種があるとされている。しかし、申請者は先行研究を詳細に検討する中で、「常人の恋ふといふよりは余りにて我は死ぬべくなりにたらずや」

（同4080）のベシに自らの身体の状態と生命に対する認識を区別することは不可能であるように、対象の状態と主体の認識は不可分であるから、ベシにはより有効な基本的意味を設定する必要があることを指摘する。その上で、ベシが他の事態の可能性が否定されて、必ずそうなるに違いないという確信を表す点で、その基本的意味は「必然性」を表すことにあるとしている。用例の観察からベシとマシの意味的接近が想定できるため、マシの基本的意味をあり得る可能性を他と比較して一つを選択する構造から「偶然性・可能性」を担うと見なすと、ベシは他の可能性を否定してただ一つ残った事態として「必然性・不可能性」を担うと記述できることを指摘している。これは体系記述上の仮説ではあるけれども、ベシの位置づけを考察する上でマシとの対応を考案したのは斬新で本研究の大きな功績の一つである。申請者はこの仮説を検証すべく上代から中古までのベシの用例でその妥当性を確かめ、ベシの当為・適当・命令・禁止の意味を事態に対する必然性・不可能性の把握から位置づけることに成功している（第一章・第四章）。さらにベシに関する一連の分析結果が作品研究にも応用が可能であることを、万葉歌の訓詁を試みることで確かめている（第五章）。

以上は、申請者が文学研究と語学研究の間を往還しつつ、古代日本語の表現構造を紐解く中で得られた成果として高く評価できる。ただし、マシの偶然性はベシの必然性からの推論であって、結果的にそのことが窺えるとはいえ十分に論証されたとはいえない。偶然性と必然性の意味把握がどの程度有効かは今後検証が必要であろう。本申請論文では触れられなかったいわゆる「推量」の助動詞としてラムとラシのあり方、未然形接続と終止形接続の差異など、事態を可能性として提示するあり方を巡ってはなお課題が残されている。けれども、マシとベシの対照的な把握と、ムの意志から推量への派生を用例から導出した点は、古代日本語の助動詞意味論として、今後の発展が大いに期待できる研究であると評価できる。なお第一章・第二章（「助動詞マシの意味」『国語国文』第88巻1号、2019.1）をはじめとする申請者の一連の上代助動詞研究に対して萬葉学会より2020年7月に萬葉学会奨励賞が授与されている。

以上の通り、本学位申請論文の研究成果はすでに複数の学術雑誌に掲載され一定の評価を獲得しており、その独創性と学術的価値は高く評価される。したがって、本学位申請論文は、共生文明学専攻　歴史文化社会論講座に相応しい内容を備えており、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和４年１月２１日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降